

院外茶話

vol.126 平成 27 年 11 月 1 日

昼はラーメン

夜は居酒屋

予定も未定の

わがまま一人旅

続・旅に行こう



日本最北端稚内にある鉄道の終点。

「暑いですね、今日はどちらへ？」

ただの挨拶ならばこれだけでいい。黙って通り過ぎることもしないし、立ち入ったことも聞かない。これが普通。

聞かれた方も、行く先が蕎麦屋や郵便局ならいいけれど、サラ金や風俗店だと答えにくい。その場で気の利いた嘘も思い付かないし。そんな時には、

「ちょっと野暮用で」

これが無難。

旅支度をして駅に向かっている時にも、

「今日はどちらへ？」

「ちょっとそこまで」

「ちょっとそこ」の「そこ」とはどこか。誰でも知っている旅先と言えど伊豆、箱根。京都、奈良。日本三景に三大祭。

変わったところでは、日本三大がっかり名所と呼ばれるところがあって、それは札幌時計台と土佐のはりまや橋、それに長崎のオランダ坂である。

確かにオランダ坂はただの坂に過ぎなかったし、札幌時計台にいたっては気付かずに、通り過ぎてしまった。

でも、それぞれの由くを知っていれば、がっかり名所を見る目も、また変わってくることだろう。



名の知れたはりまや橋。

「土佐の高知のはりまや橋で、ぼんさんかんざし買うを見た・・・」

ペギー葉山は笑顔で歌っていたけれど、由来を聞けばあまり明るい話題ではない。それは二人の坊さんが、ある娘を巡っておりなす三角関係のもつれで、一本のかんざしが発端になった事件。

詳しいいきさつはともかく、一人の坊さんが色恋沙汰の濡れ衣を着せられて、娘とお駆け落ちをするが、結局捕えられる。三日間、晒し者にされたあげくに、土佐を追われたという悲恋の物語であった。

この話を聞いていけば、はりまや橋の上に立っただけで、土佐の空気の匂いが違う。近くにかんざしを置いた小間物屋でも探してみるだろう。

がっかりといえども、名所には名所と言われるだけの理由があるもので、何年たっても地味な人気は続くに違いない。

一方、派手なスポットはユニバーサルスタジオアムやスカイツリー。今はいいけど、もっと

大きなテーマパークや高い塔ができれば、この人気は何時までもつか。今のうちに見ておくといいと思うけど、まだ行ったことがない。

では、一人旅に出かける「ちょっとそこまで」とは具体的にどこか。

一人旅には何かのテーマがあるもので、若者の場合は各駅停車の旅や、日本縦断。自転車や徒歩で出かける強者もいて、それはもう旅というより挑戦である。

こんな旅をしたいと思った時期もあったけど、いまさら人生が変わる訳もないし、第一そんな体力はない。病気に備えて保険証を手放さない旅なんて、情けなくて。せいぜい、日本全国居酒屋めぐりくらいなら、できるかもしれないが。

それでも、振り返って見れば気になる一人旅がいくつかあった。

法事の席で親族の長老から、祖先の話聞いたことがある。父の実家は若狭にある小さな村で、祖母はその隣村の熊川宿から嫁にきたのだと。

熊川には何度か足を運んだことがあるが、祖母の郷とは知らなかった。その頃の熊川とはどんなところだったか。



熊川はきれいな観光地に生まれ変わって。

父が若い頃には東海道線で東京から大津に行き、そこから船で琵琶湖を北上した。後は馬か徒歩で、熊川に着くまでまる二日を要したという。そんなへんぴなところでも、熊川は若狭街道、別名鯖街道の途中にあって、ずいぶん栄えた宿場であった。

久々に訪れると、砂利道は観光用に整備をされて、旅籠は民宿に変わり、古い村役場の中には資料館ができていた。

小さな村を何度か往復して、祖母の実家と

おぼしき家も見つけることができた。祖母が生まれた頃の熊川に思いを馳せて、名物の葛餅を食べて、その日は海辺の小浜に投宿。夕食は若狭名物小鯛のささ漬け、焼き鯖で一杯。

不謹慎な発想かもしれないが職業柄、僻地医療の実際を見たいと思った。僻地というと、行政ではややこしい判定基準があるが、どう見ても北海道が一番。

稚内から 100km ほど南に下ったところに、人口 1000 人にも満たない音威子府村がある。隣村までは 30km も離れた陸の孤島。隣村も多分、陸の孤島。

医師会誌で目にしたのは、ここで 10 年も僻地医療に携わった、ある医師の論文だった。村自体は今も人口が減る中で、患者数は増え続けて、ついに年間 2 万人もの診療に当たったというから、近隣の人がみなここに押し寄せたことになる。

最北の街と言えど、その気になれば飛行機で 2 時間ほど。稚内からは列車でさらに 2 時間をかけて、音威子府村に着いた。この駅で降りたのは私一人。ホームで一人の駅員に会った。しかし、昼前というのに、売店も立ち食い蕎麦店も開いていなかった。

診療所に向かっても、すれ違う人はいない。静まり返った村を、時折大きなトラックが通り過ぎて行く。

ついた先には、立派な診療所があったけど、時が止まったような建物で、静かに診療が行われていた。冬場には想像もつかない雪で覆われるこの村で 10 年の長きにわたり、医療に携わった先生に最大限の敬意を表します。

この度は僻地の空気を吸っただけ。再び稚内に戻って、利尻の雲丹は美味しかったけど、無力感に包まれた旅でした。



屋根付きの陸橋を見れば雪深さがわかる。